

会 議 録

会議名 (審議会等名)		相模原市立博物館協議会				
事務局 (担当課)		博物館 電話042 - 750 - 8030 (直通)				
開催日時		令和6年7月11日(木) 午前10時00分~午後0時00分				
開催場所		博物館 1階 小会議室				
出席者	委員	9人(別紙のとおり)				
	その他	0人(別紙のとおり)				
	事務局	6人(鈴木部長、並木館長、外4人)				
公開の可否		可	不可	一部不可	傍聴者数	0人
公開不可・一部不可の場合は、その理由						
議 題		(1) 相模原市立博物館活動評価書について (2) 令和5年度博物館事業報告について (3) 令和6年度教育普及事業計画について (4) その他				

議 事 の 要 旨

(1) 相模原市立博物館活動評価書について

相模原市立博物館活動評価書について、事務局より説明を行った。

(岩野会長) 今、説明していただいたこの評価書の案ですけれども、これは、今日ここにご参集いただいている皆さん方がとても時間をかけて、おそらく苦労して有識者意見、そしてその評価を書き入れていただいたわけですね。リストアップされた有識者意見をいま初めて拝見しており、他の委員の方も同じだと思うんですが、非常に適切に、とてもいいコメントがそれぞれ出ているなという感想を持ったんです。そういう中で、今、事務局の方から説明内に質問事項的になっているものについて事務局側の見解や回答を述べていただいたことは、とてもいいことだと思います。大事なことは、この有識者意見が出て終わりでは困るということです。これをどこまで次年度以降に反映してくれるのかということが、私たちは一番気になっている。

そういう点では、少しでも回答していただけたという点では、今までより少し前進したのかなと思います。そこまでが私の感想です。この後は、この議題の1番について、各委員の方から何か質疑あるいは疑問点等コメント等いただければありがたい。

(根岸委員) 4-2b のキットの貸し出し、すごく興味深いなと思って拝見させていただいて、ちょっとコメントもしたんですけれども、このキットを使っただけの出前授業ですとか、学芸員さんによる、出前授業ですね、そういうのを行った時に、例えばこの評価をする私たちが実際に授業を参観できるとか、そういうことの呼びかけはあったのでしょうか。

(事務局) 過去に参加された方はいないし、呼びかけも積極的にはしていない。

今後、そこは対応できる場合もあるが、学校側との調整も必要です。

(根岸委員) ちょっと見てみたいと思いました。

(事務局) 出前事業は件数が多いので、その辺は今後の課題ということで、こちらが先方の意見を聞きながら検討したいと思います。

(関委員) 私も全く同じことを思っていて、実際どういう風に使われているのだろうかとか、お子さんたちの反応等を見ないと、意見できない。近所の小学校やなんかでそういうイベントがあれば連絡いただいて、参加してみたい。小学校の学校の了解は必ず必要だと思うが、そういうことができればと思う。

(岩野会長) これについては他にいいですか。

(事務局) 今後、検討していきたいと思います。

(浜田委員) この評価を書く時に常設展示に関する項目がなかった。収蔵資料の充実(1-1b)のところに入れさせてもらったんですが、1つは来年開館30周年を迎えるのですが、未だに常設展示の改修ができていないことは引き続き市に要望を続けたいと思っています。

2つ目は、最近割と頻繁に展示見学に来るのですが、最近、管理が十分でないような気がします。蛍光灯とかスポットライトなどの照明が切れているものが散見され、結構目立っており気になっている。その辺の日常的な管理をもうちょっとしっかりしてほしいなと思っています。そういった内容の評価項目がなかったので、ここで直接発言をさせていただきます。

(事務局) はい、わかりました。

(岩野会長) 17ページ有識者意見の下から2番目、「常設展示の全面リニューアルは喫緊の課題である」に関連した話ですね。それから先ほど事務局から、4-2の項目を来年度以降に検討したいという話がありましたが、これはまた後程にしましょう。全体の1番から4番までの評価項目について何かありますか。

では私の方から、一般論になるのですが、今回、段階評価を1から4までつけさせていただいたのですけれども、おそらくは、多分4.0になることはほとんどないんだろうなという感じはしていた。10人全員が4を出して初めて4.0ですから、1人でも3を出せばきっと下がってしまうという点で、これは自己評価とか有識者評価も同じような形

で、どうしても下がり気味になってしまう。4.0を目指してもなかなかならないということは、やはり頭に入れておく必要がある。その観点からこの一覧表を見ると、今回、特にこの2番の展示教育事業の推進については3.9、宇宙教育の3.8は非常に高評価になっている。ここが当然高評価にならないと逆によろしくないという点では、納得のいくような数か。4.0にならなくても、より近い、ほぼそれに近いところにあるんだろうと読み取れる。それと4-1 関連機関との連携について、これも3.8をつけることができた点は納得できる点であり、よかった。

その反面、やはり3.0とか3.1前後ぐらい、このどちらかに分かれてしまうという傾向にあるんですね。これを少しでも数字を上げていく努力を今後は考えて、どうやって上げていくのかということもぜひ頭に入れながら、この評価について有識者意見、皆さん方でどういう風にお考えか、コメントをいただきたいと思います。

(佐藤委員)4月から着任しましたので、この間館内を1回見させていただいて、あとは資料は見させていただいたのですが、今の評価のところと言うと、評価自体をどうするかはちょっと難しいなというところがあります。仮評価でもいいということだったので、今回オール3をつけてしまったので、おそらく4にならなかったのは、私の評価が影響しているかと思います。私自身も学校の管理職をしているので、必ずその年度の教育目標を立てて、最後には振り返りをして、成果と課題ですね、次年度の改善策など同じようなことをしています。定性的評価と定量的評価という2つの側面が学校にもありまして、特にちょっと私が難しいなと思ったのは、来館者数、人数等は非常に大切なところなのですが、単純にその数値を見て比較してそれが良かったかどうかというのを判断するのは外部からは非常に難しいなと感じました。博物館自身としての目的、目標があり、来年度はこういう企画、こういう方針でやるので、これぐらいの人数を目指していきたいとか、ある程度そういった数値目標が先にあり、それを達成できたのか、達成できなかった場合には何が足りなかったのかという自己評価を示してもらいたかった。

単純に結果を見て、その結果が良かったかどうかというのは色々なものが集まってきている、もしくは狙った年代とかこういう年代向けの企画展示をやったので、この年代の人数が着実に増えていたとか、もう少しその辺を示していただけると、初めて見た我々、私としては、やっぱりそういったものがあるって、その数値の背景があり、目指したものに対する達成度ですかね、そういうのがないと評価しやすい。皆さんきっと長くやっていらっしゃるので、そういう評価、歴史、経緯をわかっているのかもしれないですけど、この2番、展示関係ですかね、そこの数値部分では評価がしやすかったかなってところが実際感じたところです。

それから、小学校の校長先生もいらっしゃいますので、やっぱりその学習指導要領の中では、外部の機関、特に博物館や科学館との連携というのが強く今言われているところでもあります。なぜかという、学校の授業だけの学びではなくて、それが社会生活の中でどんな風に使われていたのかとか、今後どうやっていくのか、実際にものに触れてみるとか、高校でもやってますけど、スポット的に大学の先生に来てもらって、専門的な学びに触れることが大事であるからです。

やはり教員だけでは多岐にわたる部分の専門家ではないので、そういう先生に来ていただいて専門的な授業をやっていただいて、教員も

勉強になるということもあるんですね。ですから、やはり博物館が果たす役割、特に小学校段階っていうのは非常に大きいものがあるかなと思います。先ほどの貸し出しキットもそうですし、小学校との連携をどう進めていくかという点について、小学校の時の体験は非常に大きな影響があると思うので、そこは今後、常にだと思えますけど、考えて我々もアドバイスや応援ができればいいかなと思います。

それから、逆に言うと、小学生や高校生が何か一緒に調査研究をしてこちらで発表するような機会、サイエンス部が昨年発表したというのは見ていましたけど、そういう学びの機会がいくつかあったり、コラボレーションしていくような機会というのが、学校の発表の場としても、例えば小中学校でもそういうものがたくさんあってもよいかと思います。小学校等各学校から応募を募って発表するようなチラシを配ってみたりだとか、なにかそのような発表に向けて、調査研究していくというのも、今後はあってもいいような感じがしました。

(岩野会長) 今、学校サイドからそういう要望を含めた意見が出たのですが、これについては事務局の方から何かありますか。

(事務局) まず、学びの収穫祭に関してですが、発表団体は博物館で活動しているボランティアさん、学芸員が関わった市民団体、学校に関しても、学芸員が関わったという決まりをつけています。それをつけないと、あまりにもたくさん希望団体があっても、そこでどう選ぶかという判断をしなければいけませんので、今現状、相当な団体さんが発表しますので、少なくとも広く募集するという形は取っておりませんので、今後も学芸員が関わったところという点は継続していきたいなと思っております。その中で、学芸員が例えば夏休み中に、アドバイスをして、それについてまた見てくださいとなり、結果的に発表したという例はあります。募集して実施するには発表者を選ばなければならず、その審査が必要になりますので、現段階では少し難しいので考えておりません。

(事務局) 今、数値目標の件がありました。これまでの経過を申し上げますと、最初の頃の活動評価では数値目標を掲げておりました。ただ、今度は目標を設定したその根拠が必要になってしまいうんですね。そこがまたなかなか難しくてですね。適当に出す、それはもうお手盛りになってしまうので、その目標の設定の仕方によって、甘く設定すれば評価を高くできるし、厳しくすればそれなりの評価になるっていうようなことがあったり、その辺の塩梅がこれってどの程度有効なことなのかなというのと、協議会の中でも議論していただいたのですが、答えがな

かなか出ませんでした。そういう目標よりは、前年だとか過去5年間と比べてどうかということで、評価をしていこうという流れになった経過がございます。ただ、確かに分かりにくいという話、そのとおりだと思ひまして、今後も、その評価方法についても議論をしていただくのがこの協議会の場でもありますので、そういった点で建設的な活動評価をできるようなアイデアがありましたらまたご議論いただければなと思っております。

(佐藤委員) いい評価がやっぱり次の活動に繋がっていくと思うので、冷静な評価といたしますか。あと、先ほどの学芸員との関わりですけど、それは最もではあるのですが、例えばこの相模原の博物館が掲げている歴史、文化とかですね、使命があると思うので大変だと思うんですけど、例えば、夏休みの宿題がいいかどうかわかりませんが、そういうものをテーマで博物館で募集をして、学校の中で1次選考してもらってもいいと思うんですけど、学校で3つまでに絞って出してくださいとかね。もしくは、そういった形で、歴史、文化等々、博物館に関わるテーマで研究した小学生についてはそういった夏休みの宿題、課題を提出するようなものを作ってもらって、良いものについては学びの収穫祭じゃなくてもいいと思うんです。小学生が発表するような場作りをして、いい発表には表彰してあげる。博物館をうまく利用する、もしくは興味を引き出すというところで、学校とどう連携していくか。的外れなことかもしれませんが、そこはやっぱり考えて、みんなの知恵を絞って、どう学校と連携していけば子どもたちが興味を持ってもらえるか、また自分の勉強が楽しくワクワクするような学びに繋がっていくか。小学生って本当に3年生ぐらいまではすごくいろんなことに興味があってとてもいいんですけど、だんだん学年が上がって中学生になってくると、冷静になってくるってこともあり、世の中もわかってくると思うんですが、特に理系方面が、非常に顕著なんですけど、興味をどんどん失っていきまして。あとは、やっぱり日本の弱いところは、勉強を楽しんでいると思っていないという割合が非常に諸外国に比べて高い。必要だからやっているだけで、面白いとはあまり思っていない。世の中で役に立つと思っていないっていうのは、常々ずっと諸外国と比べてその辺は、こういう博物館との連携を通したり、実際に学びが生きているという実感をやはり小学校高学年や中学生になっても持ち続けられるようなものが小学校低学年でもっとあったらいいのかなとは思ったところなんです。

(大貫(英)委員) 今のご意見はとっても貴重だし、大事なことだと思うんですね。

これからもいかに学校教育と博物館がより密接に、連携を取りながら、その宿題も含めてということかもしれませんが、ぜひお願いしたいと思っています。ありがとうございます。

ただ、社会教育の視点から言えば、博物館は社会教育施設、社会教育機関です。ですから、子どもたちが放課後に博物館で自ら好きなこと、興味を持った学習をすること、これをきちんと保証していくのは、教育委員会の役割という風に私は認識しています。ですから学校教育と連携するということで、いわゆる出前教育とか、教材として教師が授業の効果を上げるために資料を活用したいということであれば、それは協力できると思うんですけど、学校の中での宿題だとか、学校の中の1つの行事として、その作品を募集したり、それを発表したりということは、本来的には社会教育の役割ではないと考える。

神奈川県内では川崎市民ミュージアムが学校教育として博物館の中に位置づけて、やっていることはやっています。それをやる場合には教員が教職をせずにその業務に専念してきちんとやっている。なので、博物館の学芸員がその受付をしたり、評価をするというのは、本来的な役割とは違う。連携というのは、お互いウィンウィンの関係がなくてはいけないんで、どちらかが負担になってしまうといけない。神奈川県が県立博物館でやっていた授業を見ても、学校が負担になってしまったり、必ず行かなくちゃいけないとなってしまうと負担になる。この博物館でも、小学4年生がスケートの授業とプラネタリウム観賞を同日に行うカリキュラムを続けています。学校教育側の要望でやったんだけど、それを進めていく中で、今度はふれあい科学館を作ったからそこも行かなくちゃいけないとか色々な問題が起きてます。一概に、それを良しとするということとはちょっといかがかなという意味で意見を言わせてもらいました。

(岩野会長) 他の委員の方、ご意見ありますか。

(大貫(努)委員) 4-2bの資料貸出による学習支援についてですが、資料を借りて、現物を見せることで、こういうものなのかと子どもたちもわかります。評価書の市民や有識者意見にも書いてあるように、実物で見るというのはとても大事なことだとは思いますが、私も教員をやらせていただいているので、学校の中でこういう貸し出しがあるよというのは職員に周知しているのですが、なかなか先生たちも忙しくて手が回らない。例えば国語で糸車が出てくる話を勉強する時期というのは、大体どこの学校も同じ時期なので、もし一斉に貸して欲しいとなったら、そんな何台も台数はないわけでしょうから、難しいとなってしま

うのかなと。でも、有識者意見の下から2番目にあるように年間の指導計画とキットとの対応表を作成していければ、あとは各学校の管理職が先生たちに、こんなのあるぞと宣伝すればよいかなと思う。初めは無理やりでも管理職が借りちゃって、これ使ってみなよぐらいやると、1回使ってみるといいなって勢いも感じるのじゃないかな。自分の学校からそういうのも始めてみようかなと思う。

(岩野会長) 1回使ってみると、存在も含めてその良さがわかる。周知徹底をこのコメントの意見の中にもあるわけですが、もっと図っていく必要があるかもしれません。例えば校長先生たちに各委員の先生方からできるだけキットについて言ってもらおうとか、実物を見せることができるなど色々あると思います。

それから4-2の項目の整理については意見が色々あると思うが、次の会議時に事務局からこういう形の項目にまとめ直しをしましてという叩き台の提案をしてもらえればよいと思うが、よろしいですか。

(事務局) 10月に協議会がありますので、そちらの時に議題として来年度の評価の項目案ということで提示したいと思います。

(岩野会長) 事務局の方から次回の会議の時に提案したいというお話でしたが、そういう形でよろしいでしょうか。

(大貫(英)委員) ちょっと気になった点が、4-2aの出前授業というのは学校だけではなく、公民館等も対象になるのか。学校等となっているが、社会教育関係団体がいろんな授業をやったり、あるいは学校の中で先生が教材研究をする中で、相模原にこんな土器があるな、相模原はこんな資料があるなと思った時、それを利用すればより教育効果が上がるな、子どもたちの学習が進むなと思った時に、博物館はそれにお答えしますよということの中で、この出前授業を位置づけてきたという風に思うのです。社会教育関係団体も、それを期待していたわけです。

4-2cの見学というのは、学習主体である教師なり、あるいは子どもたち、あるいは社会教育関係団体が博物館に行くことによって、博物館の展示を見るだけでなく、博物館で子どもたちあるいは学習主体である成人が、触ったり、実物を自分で操作をすることによって、自分の学習効果あるいは自分の研究を進めようというような役割がある。そのなかに職業体験だとか実習生の受け入れ等を位置づけたんじゃないかなという気がしてるのですが、そういう分け方の内容についてではなくて、統計上の区別のことか。

(事務局) いま言っていた位置付けで統計上処理をしてるのですが、この出前授業の項目中にも、実際は博物館に来て授業をしているものも

入っています。

(大貫(英)委員) 学習効果として博物館に行くという行程自体を、教師が教材化しようということと、バスとか、あるいは、みんなでどこかに集合して、ここにみんなで行って来るということ。それは全然違うことではないか。

(事務局) 書類上、学芸の講師派遣依頼で受けるか、団体対応で受けるかの違いで、統計の取り方が変わってしまいます。実際、出前授業と書いてありますが、少人数の、特に大学関係が多いのですが、特別に学芸員からレクチャーをしてもらいたい場合、団体受けではなくて、直接学芸員に派遣依頼という形で書類が来てます。そうすると統計上、出前授業扱いになります。ただ、中には人数が多い団体もあります。学芸員実習カリキュラムでの見学、実習なんかは何十人という学生さんが来る場合もあります。そういう場合は、団体見学ではなくて、一応は依頼文をいただいておりますので、出前授業扱いになっています。その辺が課題で、少し整理した方がいいのかなということを考えました。提出いただく書類が全然別なので、統計上分かれてしまい仕方がない面があるのですが、今後検討したいということで、この場で提案させていただきました。いわゆる雑多なものが混ざり込んでしまっており、分かりにくい部分がある。どういう形が小項目として良いのか、次の会議までに提案します。

(岩野会長) 他に何かございますでしょうか。

(大谷委員) いつも送っていただいているイベントニュースがすごく良くて、それをきっかけに子どもにこんな展示あるから行って見ない? という風

に

誘って、足を運ぶことが実は増えました。なので毎月発行されるものを全学校に配布することはすごく難しいとは思いますが、例えば長期休みの時にこういうのがあるから博物館においでよ、みたいな、そういう形での案内でしたら年3回で足りるのかなとも思うし、子どもたちも時間があるので、そういうお知らせをしていただくと良いと思います。年間予定表だと、その時限りで見ておしまいになっちゃって、家の壁に張り付けることはまずないと思うんです。なので、足を運びやすい時期に向けて、こういうことがあるから、よかったら博物館に親子で来てくださいなみたいな案内を検討していただけたらすごく親としては嬉しいなと思いました。

(事務局) 博物館の行事であるとか、そういったものをできないかというお話がありましたが、それにつきましてはイベントニュースという形では

ないのですが、春休み期間あるいは夏休み前にイベントをまとめたチラシを現状では博物館近隣だけになってしまっていますが、近隣の中学校であるとかそういったところにお配りをして、周知を図っています。その辺りの取り組みをどう拡大していくか、またこちらの方でもより良い形になるよう検討していきたいです。

(岩野会長) このイベントニュースは、いわゆる紙ベースであるわけです。この会議だといつもSNSでの発信を充実しようとか、そういう意見は結構出るのですが、その反面、紙媒体も大事だということですね。高齢者向けということだけではなく、やはり紙で見るというのは、それなりの効果があるだろうと思います。若い人、小さな子どもさんたちにもですね、そういうものを見てもらうこともやはり大事なことです。ぜひこれが拡充するように、ご検討いただくとありがたいです。他にはございますでしょうか。

(関委員) ここで言うことかわからないが、評価の44ページの有識者意見の1番下に、北名古屋市民俗資料館のことを書きました。ラジオでこの資料館の取組が紹介されていました。我々博物館というと、子どもたちを呼ぶことがとても大事なことだと思うのですが、ここでは高齢者の方を平日に呼ぶということが主眼です。土日は子どもたちは来るけれど、平日は来ないじゃないですか。その空いてるところをどう活用するかという、ここの博物館でいうと常設展示の昭和の暮らしの展示コーナーを活用するということが高齢者の方たちに来ていただくということができるのではないかと。高齢者の方々も博物館に来ると、ものすごく話に花が咲くというか、家や施設に戻った後でもその方たちの会話が續いていたり、我々も私も含めてですが、高齢者の会話とかその活性化に役立つというようなことが北名古屋市民俗資料館でされているというのを耳にしたものでここに記入しました。子どもたちもいいですけど、高齢者世代に向けての発信とか、そういう人たちの平日の活用とか、例えばこの前一緒に見に行った旧式の洗濯機がありましたね、あれ懐かしくて私も使ったことがあるので、そういうのがあると、これ使ったよねと盛り上がる。ちっちゃい子がいれば、これはこうやって使うんだよと話をすることによって活性化されるというようなことをやってみてはどうかと、参考になるかなという意味で記載しました。常設展示との結びつきができるのではないかと。

(岩野会長) そうですね、博物館のいろんなところと連携を取るという中で、今のお話だと日常的に高齢者の方を巻き込んでっていうんですかね、入っていただいて、例えば昔遊びを教えるとか、そういうことは

できるのではないかというようなご意見だと思います。これも含めて、ぜひ前向きにご検討ください。

他にはいかがですか。無いようなので、事務局にお聞きしたいのですが、この1番は色々な意見がでました。この後はこれがちゃんとした評価書になるということでしょうか。

(事務局) そうですね。その後の追加コメントですとか、評価数字を変更したいということがあれば、大体今から1週間ぐらいを目途にいただければ新しいコメントを加えますし、評価の方も新しい数値で作り直します。最終結果としては、評価書の総括、定性評価も全部含めたものを次回の協議会に向けて提示して、そこで議論いただいたものを、その後、会長1人という形になるかと思いますが、そこで最終的な令和5年度の活動評価書として完成したいと思います。今回の評価書の中でいただいた課題や質問に関しては、来年度の活動評価書の中でどう取り組んだかということ盛り込みたいと思います。

(岩野会長) 次回の会議の時に、今日ここで出た色々なコメント等を反映させるところは反映していただいて、皆さんに提案するということですね。そうしましたら、1番についてはこれでよろしいでしょうか。

(一同) 承知した。

(2) 令和5年度博物館事業報告について

令和5年度の博物館事業について、事務局より説明を行った。

(岩野会長) ただいま、事業報告という形で年報内容の説明をしていただきました。これは昨年度、この博物館での活動をまとめた報告書ということになるかと思いますが、ですから、過去の話の報告ですので意見も言いにくいところがあるかと思うんですが、何かありましたらお願いしたいなと思います。いかがでしょうか。

(大貫(英)委員) ちょうど部長さんもおられるんで、新規の学芸員の採用ありがとうございました。初めて動物という学芸員が採用されて、開館以来ずっと市民が期待していたのですが、なかなか採用されず、今まで秋山学芸員が生物ということで、動物も植物も一緒になって担当していた。歴史関係で言えば考古や歴史、民俗という3分野を1人でやっていたわけで、やっと担当学芸員の採用が実現しました。博物館作りの中でも、婦人学習グループの委員も来てますけど、市民の願いが達成できたということです。先ほど秋山さんが年報の中で言っていた重点施策ね、ここで考古、歴史、民俗、生物・・・とありますんで、これからは動物と植物にきちんと分けていただきたい。

(事務局)今年度から追加します。管理の方はすでに動物と植物で分けてあります。

(大貫(英)委員)ぜひ、調査研究のところ、重点施策のところは、動物分野の学芸員採用を達成できたので、市民に見えるようにしてもらいたい。

例えば文化財保護課所管の文化財研究協議会としては、生物関係の市民活動団体、特に動物関係の人たちから秋山学芸員一生懸命やってるけど、もう倒れちゃう寸前ですと。動物分野がきちんとできればいいのにとというようなことをずっと言われてましたけど、そういう中ではね、胸を張ってね、今後は大丈夫だと、動物担当をきちんと入れたと言える。

あとは市民団体として言わせていただきたいことは、博物館は調査研究機関ですから、市民の収蔵庫を作りますよという約束で博物館作ってきた経過があるわけです。できれば継続的な採用、職員に逃げられないような体制、あるいは専門職員を安易に配置転換しないようにね、継続的な調査研究と継続的な展望を持った教育実現ができるようにして欲しいということ要望したいと思います。

(岩野会長)本当に貴重な意見だと思っております。私も実は同じような意見で、先ほど秋山学芸員から報告があったこと、例えば講師派遣というところを見ても、非常に1年間の中で多岐にわたって学芸員が色々なところを見ている、そういう一端が見えます。それだけではなくて、しかも自分の仕事に加えて、博物館の仕事もいろいろとやらなければならない中でも本当に激務であったんだろうなと思います。そういう中で、今回一応動物担当の新しい学芸員が入られたと。秋山学芸員は多分、植物の方に戻られる、戻られるというか、そこは分けられて今年度から活動されて、少しは負担が減るんじゃないかなという風に私自身も大きな期待を持っています。もう、分けてやってらっしゃるんですか。

(事務局)まだですね。今回、動物担当で学芸員を入れましたけど、専門を明確に昆虫ということで募集をしました。なのでいまは、その昆虫に関しては少しずつ業務分けをしています。この夏の宮ヶ瀬での講座の派遣依頼を受けるとい風に、だいぶ切り分けをしてきております。

(岩野会長)だいぶ負担が減りそうですね。本当に今まで大変だったと思います。他に何か2番についてのご意見はありますか。

(佐藤委員)今ちょうど動物、植物の話が出たので、私も興味を持っていて、心配してる部分があります。持続可能な社会をということで、もしかしたらこちらの博物館でも過去にそういったテーマで展示など企画されたのかもしれないけれど、地球温暖化で本当に毎日、今年は去年よ

りも暑いんじゃないかっていう話がよく出てますね。その中で多様な生物種がどんどん今失われています。例えば恐竜の展示をこの間見て、氷河期時代に隕石の衝突によって、寒い期間があり絶滅をしてしまった。唯一、鳥類だけが残ったというような話もありましたけれど、現代は自然の力ではなくて、人間の力によって環境を大きく変えてしまっている。これは人間の力によってしか回復できないと思うんですけど、そういったテーマはやはりみんなが共有しなければならないと思う。その中で、今動物、植物分野とちょうど話が合ったんで、相模原特有の例があれば1番いいんですけど。

例えば既に絶滅してしまったような動植物が市内にあったりだとか、今非常に危機に貧している植物や動物など、これから未来に向けて私たちが何ができるのか考えてゆくこと。歴史を振り返ることの一番大事なことはより良い未来を作っていくためだと思うので、そういう意味ではどの年代にとっても喫緊の課題であると思う。今までは何万年とかけて変わってきたものが、近年はたかだか100年単位でこれだけの変化が起きているということは、皆さん意識していてもなかなか語る場もないし、目にする場もないんですけど、何か相模原でそういうような動物、植物に関する危機的状況があって、そこから切り口を考えて、いろんなテーマがあるので、ちょうど今動植物が揃ったんだったら、そんなものも企画できたらいいのかなと思いました。その危機感はみんなが持っているところかなと思います。

(根岸委員) 私も今のお話にちょっと関連してなんですけど、その絶滅危惧種とは反対に外来種というのがありますよね。日本古来のものではない品種ものが何かの形で入ってきて被害をもたらすというものですよね。オレンジ色のポピーは外来種で、あまり身近なところで繁殖してほしくないものだっていうのは、何かで聞いて知ってはいるんですけども、道端からなにからほんとにたくさんあるのですよね。外来種であまり良くないものだと分かっているながら、でも何をするわけでもなく、市民の行動としては、実際に摘み取るわけにもいかない。何をすればいいんだろうとかというあたりが気になっています。

外来種と絶滅危惧種の間で、きつとなにかせめぎ合いみたいのがあって、なにか関係あるんだろうなと。市民目線で気になっているのが、そのオレンジ色のポピーなんですけど、そんなのも市民としてどう行動したらいいのかなどヒントとしてね、わかったらいいのかなと思いました。

(事務局) 博物館のこれは生物に限らないことですが、生物を例に出すと、相

模原地域の生物の基礎的な情報を集めて、それを標本化するというのは博物館の1つの使命だと考えております。ですから、例えば何が減った、何が増えてきた、それを知るにはまずそのベースとなる目録がなければいけないんですね。その目録を整備することがまず博物館の使命であって、そこから見えてきたものを展示とか講座とかで周知していく。教育普及活動の中でそれを示していくということが流れになります。その中で絶滅危惧種の問題に関しては、博物館が標本を集積して、その集積した標本のデータベースから読み取れることがたくさんあって、それは実は相模原市というよりは、もう少し広域的に、神奈川県全体として取り組んでおります。神奈川県全体で博物館や研究機関の職員が集まって、神奈川県のレッドデータブックを作成しているのですが、2020年に植物分野が改訂された時、秋山学芸員もそのワーキングに入っておりました。実は現在は昆虫の改訂作業やっています。新しく採用された嶋本学芸員もそのメンバーに入っております。ですから、そういう形で関わっているのが現在のところですね。

それから、先ほどのオレンジ色のポピー、ナガミヒナゲシという植物なんですけど、あれに関しては実はそれほど問題視されていないんですね。今は黄色いコスモスみたいな花がたくさん咲いています。あれが特定外来生物なんです。特定外来生物法という法律で生きたままの移動を禁止されるようなレベルの植物なんですけど、それは博物館ではとにかくどんなふうに分布しているのかというのを調べつつなのですが、博物館だけというよりは特定外来生物法という法律で指定されているので、相模原市の水みどり環境課という部署と組んでおり、相模原市のエコパーク相模原という機関がありますが、そこで自然環境観察員という市民の自然調べをするグループが登録制でありまして、そこと連携をして、全体的な調査をやって、水みどり環境課の方で必要であれば駆除をするという、そういう流れを作っていますので、これはもう本当に駆除というところまで行くと博物館だけではできないので、他機関と連携をした事業として進めています。

ちなみに、ポピーの間では栽培禁止植物があって、アツミゲシなどいわゆるアヘンの原料になるものがあるんですけど、それについては市内でもやはり発見された事例があります。そういったものが見つかったら、それがアツミゲシか、または影響のない無害のポピーかというのは私の方でも何度か同定をしていますので、そういう形での連携を取っております。相模原でも絶滅危惧の色々な動植物がいるのですが、一方では新しく増えた新物の外来種もだんだん増えているのも事実です。

先ほど年報で申しましたが、例えば動物なんかだと、いわゆるクリハラリス、あれも1つ大きな問題になっています。

(岩野会長) 現在行っていらっしゃるそういう活動ですね。これはちょっと私からの要望ですが、クリハラリスについては、先般も展示などがありました。例えば今増えている外来種の問題とか、知らずに消えてしまっているような動植物、色々あるはずだと。そういうもののいわゆる広報活動の一環としての展示会、報告会、そういうものをぜひ頭に入れて活動していただいて、報告していただきたいという思いがあります。いままでも植物学会を通じたりして色々、特に緑区あたりですね、記録中など、そういうのは見てるのですが、果たしてそれがどこまで本当にいなくなっているのかとかというのは、私たちいわゆる一般の市民にはなかなかまだ見えてこない部分があると思っていますので、今すぐとは言いませんけれども、年2回、特別展においてこの内容を含めてできるのであれば、そういうものを広くアピールできるように工夫してご検討していただくと大変ありがたい。私も今、「相模の蝶を語る会」の代表ですけれども、相模原市だけでなく神奈川県全体で、いわゆる外来種、それから絶滅危惧種をずっと前から会として調べています。同好会レベルではあるけれども、それを毎日のように報告していただいて、膨大なデータベースが実はあるのですね。これは全国レベルの他の研究会でも負けない、トップクラスと自負してるのですが、いわゆる何が減って何が増えているのかというのは、そのデータベースを見れば、それこそ何十万単位で神奈川県内の蝶の記録が集積されており、同じように今、他の昆虫とか植物でもそういうことが少しずつやられていくと、神奈川の生き物の動きがわかるはずなんですね。その中で、私は蝶のところを調べているわけです。そういうものがこういう博物館なんかとさらに連携して色々できると、もっと生物中の多様性も含めてですね、見えてくる部分がある。今後ともご検討いただければと思う。ちょっと長くなってしまいました。あと、この2番について、何かありますか。

(大谷委員) クリハラリスの展示を見まして、光明学園の生徒さんの剥製とかもあってすごく良かったです。あと、その後の広島原爆について、高校生がお話を聞いてそれを絵に書いたというものもなんかすごいなと思ったんですけど、やっぱりそういう学生さんだったり、団体さんだったり、そういう方たちとのコラボレーションの展示というのですかね、そういうことをしていただくとすごくいいなと思いました。クリハラリスはNHKのテレビで放送されていましたね。ちょうど見に

行った日にNHKさんが来ていて、本当にクリハラリスは面白かったです。

(岩野会長) ありがとうございます。他にはございますでしょうか。

(浜田委員) 話を戻して申し訳ないですが、学芸員の採用について少しよろしいでしょうか。今日、部長さんがいらっしゃいますので、動物学芸員を新規採用していただいたことは本当に嬉しく思っております。先ほど大貫英明委員の発言にもあったのですが、今日事務局にいらっしゃる秋山学芸員の定年が近い将来、この先に見えてくるのだと思います。その時にですね、再び新規に植物のちゃんと専任学芸員を採用できるように、頑張っていたいただければなと思っております。ここで採用された動物の学芸員がまた生物担当ということがないように、それを祈りたいと思っております。秋山さんもここで20数年活動されてきて、秋山さんを支持すると言いますか、バックアップする市民がたくさんいらっしゃいます。博物館でやっぱり大事なことは、資料も大事ですけど、市民との連携がとても大事で、それはもう1年、2年ではできないことです。その連携がより長く続いていくように、ぜひ職員体制の充実というのをお願いできたらと思っております。私も一応内部の人間だったので、将来的な心配をしてしまいます。人事はなかなか難しいところがありますけれども、ぜひ秋山学芸員の穴がちゃんと埋まるようにということをいま改めて要望します。どうか部長、よろしく願います。

(鈴木部長) ありがとうございます。採用計画等についてですね。これまでもなのですが、今後につきましても、やはり長期的な部分として計画的な採用をというところを人事当局の方とお話しているところもでございます。また色々皆様のご意見等もいただきながら、そういった職員体制の部分の拡充というところをしっかりと進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いしたいと思っております。

(岩野会長) よろしく願います。

(3) 令和6年度博物館事業計画について

令和5年度の博物館事業計画について、事務局より説明を行った。

(岩野委員) 何かお聞きしたいこととかございますでしょうか。ないですね。

(4) その他として、事務局より「プラネタリウムで神楽」の視察についてと、民俗企画展「上溝番田の神代神楽」の案内をおこなった。

(岩野委員) なかなか私もプラネタリウムでそんなことができるんだって本当に知らなくて、まだプラネタリウムは改修前であるのですが、とてもい

い企画だと思うのですね。前回のコンサートの時も私は本当驚いたのですが、とっても素晴らしかった。今回の神楽もあまり例がないのではないか。こういうものはどんどん継続して、いろいろな企画をして欲しい。

事務局の方からは以上ですが、みなさまから何か連絡事項等ございますでしょうか。

(浜田委員) 最後、1点だけ質問なのですが、一昨年、博物館法が改正されて、条例が昨年改正されたのはこちらで確認できたんですが、登録をし直さなければいけないと思います。その準備はいかがでしょうか。それだけ教えていただければと思います。

(事務局) 博物館法の改正に伴って5年間はみなしの登録ということになります。実際、本市の場合ですと、登録事務をやっているのが教育委員会の文化財保護課になっています。登録をする文化財保護課の方で、予算の確保であるとか、そういったものが若干必要になってくるというところもございますので、文化財保護課の方と協議を進めて参ります。少なくとも見なし登録が切れる前には登録をきちんと申請する予定で進めております。

(浜田委員) 登録から外れてしまうと命取りになると思いますので、手続きよろしくをお願いします。

(岩野会長) ほかにご意見等ありますか。

(佐藤委員) 既にやっているのかどうかわかりませんが、いま学校では働き方改革がすごく叫ばれています。学芸員さんの数は限られているということで、生物の分野で今年は採用されたということで喜ばれてるという話がありましたけれど、働き甲斐ということも含めてですが、博物館の魅力を高めるという意味で、専門的な分野の学芸員を補充するとか、もしくはさらにタイアップするっていう形で、他県内等の博物館との連携により博物館で何かができたりしたらよりよいと思う。

この協議会には大学の先生や専門家の方、我々学校教育関係者もいますので、教員で力になれることもあったりだとか、大学で特定の研究をされてる方は非常にたくさんいらっしゃると思う。どこまで協力できるかわかりませんが、外部の力をうまく利用して学芸員さんだけではなく、コラボレーションすることによって博物館で何かいろいろなことができたりだとか、そういうことを押し進めていくというのは、学校も一緒なんですけど、博物館も同じだろうなと思いました。持ってるカプリアルフアですかね。そこをうまく繋げていく。そんな形で、この協議会の委員を含め、私だと相模原の県立高校の教員に

は、校長を通して話ができますので、こんな要望が来てるのでお手伝いできることはありませんか、なんて声かけもできますので、ぜひ活用していただければと思います。

(岩野会長) ありがとうございます。ここで議事を終了させていただきます。

次回は令和6年10月頃の開催を予定。

以上

相模原市立博物館協議会委員出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備 考	出欠席
1	大貫 努	市立小山小学校校長		出席
2	佐藤 和彦	県立相模原弥栄高等学校校長		出席
3	大貫 英明	市文化財研究協議会会長		出席
4	大谷 春枝	市 P T A 連絡協議会書記		出席
5	吉川 恵美	市女性学習グループ連絡協議会代表	副会長	出席
6	岩野 秀俊	元 日本大学生物資源科学部教授	会 長	出席
7	浜田 弘明	桜美林大学リベラルアーツ学群教授		出席
8	藤本 正樹	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所 副所長・教授		欠席
9	関 明	公募委員		出席
10	根岸 恵	公募委員		出席